

(曾於郡志布志町帖鎌石橋)

位置と環境

遺跡地は前川の支谷の尾根にあり、段々に開いた畑であるが、今は矮木の自生に任された農道に面した台形の広さ135m²の平坦地である。標高45m、道路を隔てて前川の支流の大畑川に望んでいる。河底は下刻が進み大小の礫が露呈し、砂岩礫と熔結凝灰岩礫からなり、基盤は熔結凝灰岩層である。遺跡包含層に大量に発見される礫は、これらの礫を採集したものである。

調査の経緯

昭和56年1月20日瀬戸口望の案内で、現地を調査した。遺跡地の東側は、削り取った断面を露呈しており、断面には、アカホヤ層、桜島下部軽石層、基盤の洪積世砂礫層が明瞭に現れており、桜島下部軽石層と洪積世砂礫層との間には石組炉が半ば切断された状態で露呈しており、層序は水平に堆積していることが、道路側断面の状況から推定された。この状況は、発掘のための準備調査を完備した状態といて良く、お膳たてが完全にできた状態であった。鹿児島県考古学会によって、昭和56年2月2日より、同16日まで発掘調査を行った。

遺構と遺物

地層は水平に堆積し、15層を数え、その内に、二つの鍵層がある。一つは第3層の鬼界カルデラ起原の火砕流で、¹⁴C年代測定では、6,000年 B. P. で

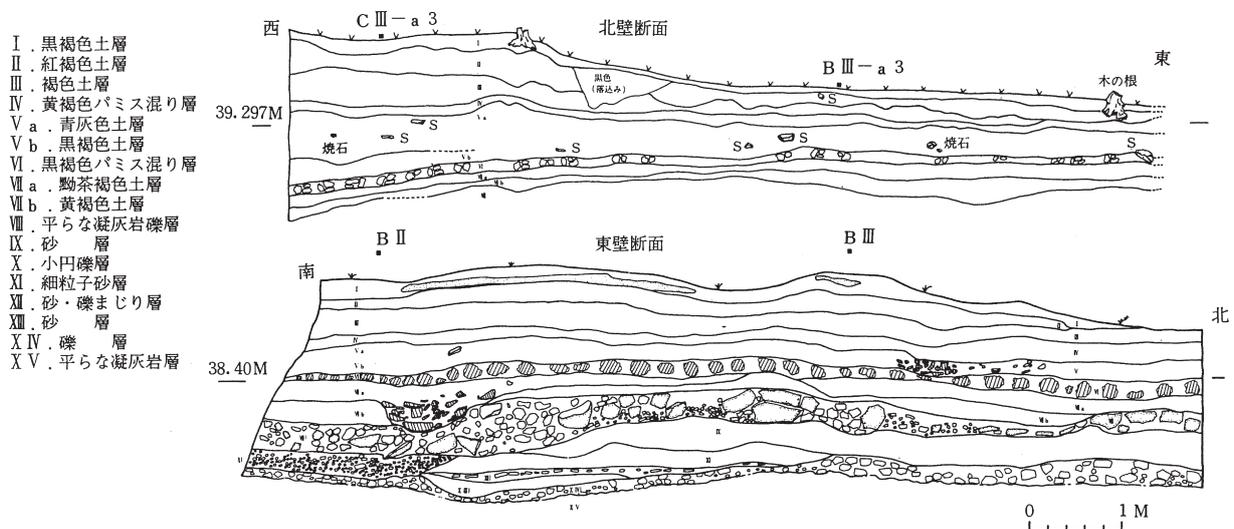


第1図 鎌石橋遺跡の位置

あり、今一つは第6層で、桜島起源の下層軽石層で、¹⁴C年代測定で10,630~11,200年 B. P. である。この鍵層の存在によって、遺跡の所属する時期が明らかになった。

第1層は黒褐色土層で、下部から叩石が僅かに見られるが無遺物層と見て良い。第2層は紅褐色土層で縄文晩期の黒川式に続く時期で、凝灰岩の角礫を内蔵する埋甕の祭祀遺構と、集石遺構2基が発見された。第3層は褐色土層で、鬼界カルデラ起源のアカホヤ層である。遺構としては、A II区からB II区えかけて、高さ48cm、底部幅48cmの三角形の川原石を用いた立石が設置され、基部に円礫2個が配置され、いずれも火熱をうけたものであった。

第3層の土器は縄文前期の曾畑式土器と樋口清之発掘・日木山洞穴出土の日木山式土器の内、相交弧文を除いた条痕文土器と、点線文土器と同類である。



第2図 遺跡断面図

鬼界カルデラの火砕流で大隅半島の南半は壊滅したと言われているが、鎌石橋遺跡では、これらの古い土器がしっかりとアカホヤ層から出土している。第3層の石器には、石鏃・スクレイパー・石斧・磨石・剥片石器などが出土している。

第5層は鬼界カルデラ起源の火砕流（Ⅳ層）直下の地層で、Ⅴa 灰色土層と、Ⅴb 黒褐色土層の二層に別れ、いずれも包含層である。遺構には16か所の集石遺構が、径50～20cm、深さ10～20cmの掘込みに、砂岩を主とする拳大の角礫・円礫が配置され、集石内には木炭が検出され、礫は殆ど火熱を受けて変色し、土器が出土して調理が行われたことを示している。土器は早期初頭より同終末に至るもので、貝殻による土器面調整を特徴としている。鬼界カルデラ火砕流直下から出土した第3類土器は深鉢形平底の土器で、口唇部外縁に篋刻みを施し、内外面を貝殻による器面調整し、口縁外面を横位の貝殻条痕文でかざっている。火砕流が凝着して、その絶対年代を示している。轟Ⅰ式と名付けた。その下層からは塞ノ神A式・B式（1類）が出土している。最下層には早期初頭の窩文土器が出土している。深鉢形の器形で、頸部に凸帯を一条巡らし、口唇部と凸帯に貝殻刺突文を施す。口唇下に窩文を一行巡らすもので草創期から現れる古いタイプである（第3図）。この遺跡が示すように、南九州には貝殻条痕文土器文化が古くより存在していた。

5層の石器には石鏃・削器がある。

7層にはAⅡ-e 1区に集石炉を検出した。8層の凝灰岩層に掘り込まれたもので、径1m、奥行き

50cm（前面は決損）、深さ40cmの楕円状である。周辺は凝灰岩であるが、炉内は砂岩質の川原石を用いている。底には大きな石を敷き、周囲は小石で囲い、内部にも礫が一杯詰まった状態である。炉の石は焼き火によって赤褐色に変色し、炉の下部の土層まで火熱による変色が認められた。礫の隙間には木炭が残存し、この炉が長期にわたって活用されたことを物語っている。時期は6層の桜島起源の最下軽石層の下層出土であるから後期旧石器時代に属するものである（第4図）。7層からは、石器にはナイフ形石器・細石刃・舟形石器が出土しており、土器は13片出土し、内、隆帯文土器5片あり、2片は口縁部、1片は底部、ほかは無文である。

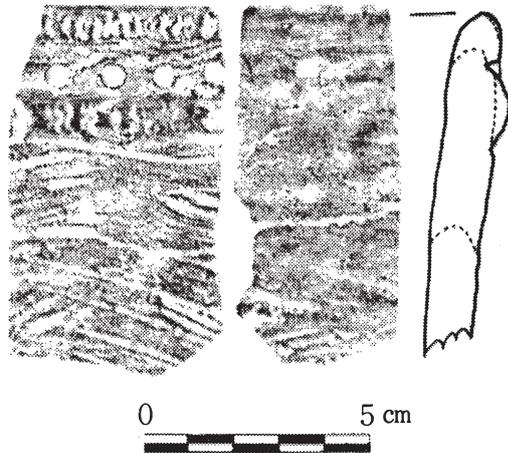
本遺跡は二つの鍵層があって遺跡の所属年代が明瞭である。後期旧石器時代の特異な石組炉と共に、自然礫を縦割りして刃を付けた特殊の製作手法を行った石斧があり、早期の層からは貝殻による条痕文土器文化が継続し、火砕流による文化の断絶を説かれながら、アカホヤ層から日木山式・曾畑式などの土器が出土して、日木山式に条痕文文化が引き継がれている。南九州に於ける条痕文文化圏は広く、鬼界カルデラの火砕流の広がりよりも条痕文文化の分布範囲が広がったことは両者の比較で明瞭であるから、条痕文文化の継続したのは当然である。

資料の所在

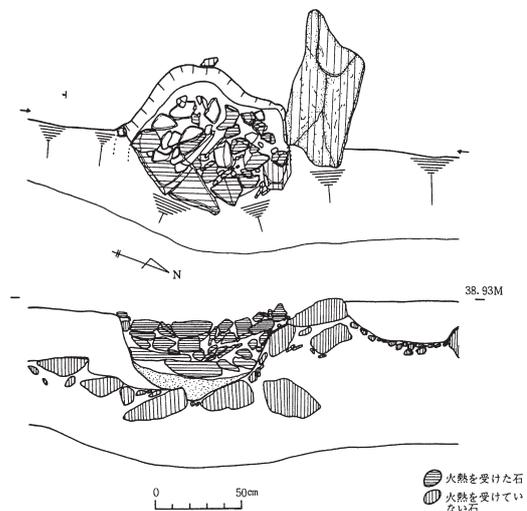
出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

河口貞徳1982「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古』16号
（河口貞徳）



第3図 Ⅴ層下部出土の窩文土器



第4図 第Ⅶ層の集石炉